

記憶の闇

甲山事件 1974-1984

松下竜一



記憶の間

——甲山事件1974-1984——

松下竜一

河出書房新社

記憶の闇

©1985 Printed in Japan

—— 甲山事件 [1974→1984] ——

一九八五年四月十五日 初版発行

一九八五年十月二十八日 三版発行

著 者 松下竜一

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十一番二
TEL 営業 〇〇三三四四〇四一
編集 〇〇三三四四〇四一
振替口座 (東京) 〇〇一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-00394-X

目次

第一章

7

第二章

65

第三章

133

第四章

195

関連地図

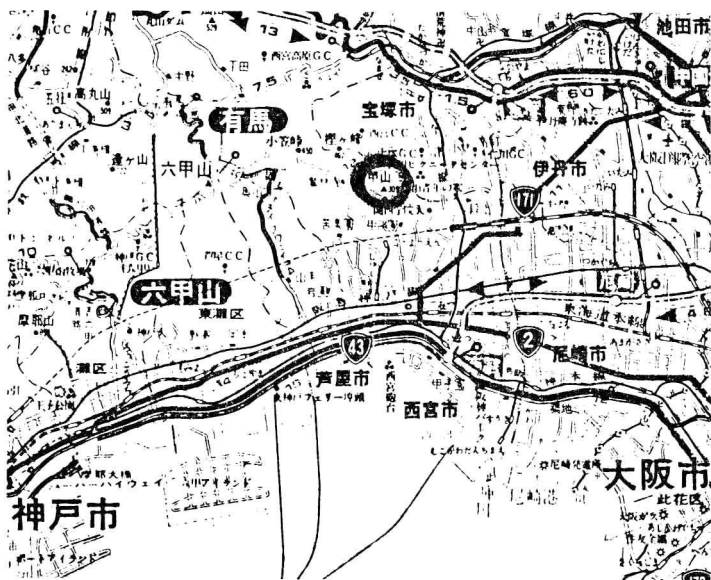
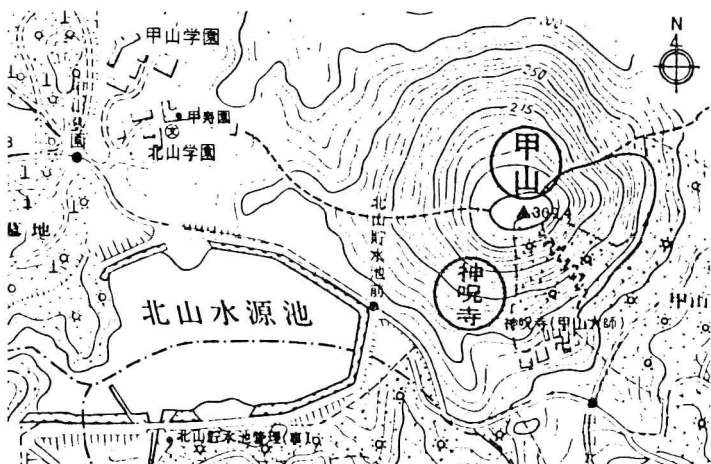
3

甲山学園平面図

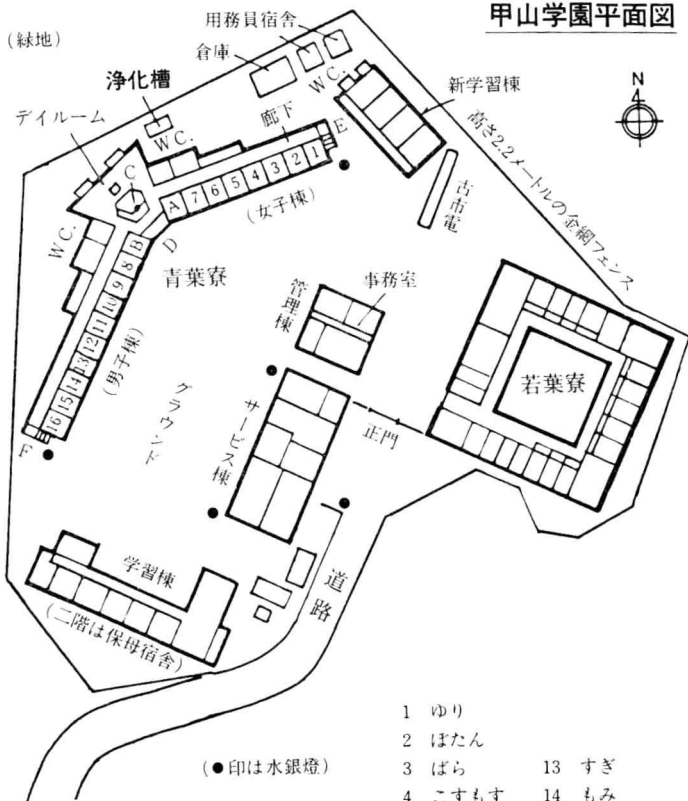
4

装幀
装画

荒川じんぺい
荒木哲夫「白い部屋」



甲山学園平面図



- | | | | |
|----|------|----|-------|
| 1 | ゆり | | |
| 2 | ぼたん | | |
| 3 | ばら | 13 | すぎ |
| 4 | こすもす | 14 | もみ |
| 5 | うめ | 15 | かし |
| 6 | さくら | 16 | くす |
| 7 | 仕分け室 | A | 女子保母室 |
| 8 | あすなろ | B | 男子保母室 |
| 9 | いちよう | C | テレビ |
| 10 | きり | D | 玄関 |
| 11 | まつ | E) | 非常口 |
| 12 | ひのき | F) | |

記憶の闇

——田口事件〔1974→1984〕

第一章

I

いま、ひとつの刑事事件が神戸地方裁判所で大詰を迎えようとしている。おそらく、早ければ一九八五（昭和六〇）年春には結審、夏には判決を迎えると思われる。裁かれてきたのは殺人事件で、被告は現在三十三歳の女性である。事件発生から算えれば既に十年余が過ぎたが、最初の「自白」を翻したあとは一貫して無実を主張し続けている。彼女の主張が真実であるなら、彼女の身の上に過ぎた十年余はなんと過酷な歲月であったことか。更に第一審の判決がどうあれ、なおその後の永い歲月もまた暗い影を曳き続けるだろうことを、彼女は絶望的に予感しているようである。

「あなたの主張に沿ってこの事件を記録してみましよう。私の訊くことには何でも答えていただけますか」

私（筆者）が彼女にそう告げたのは、第五三回公判（一九八四年七月六日）の傍聴を終えたあとである。

「はい、何でも尋ねてください」

彼女はそれが特徴の大きな眼で、まっすぐに見返した。

「私のことはマスコミにもすっかり書き立てられて、いまだ隠さねばならないことは何もないんですもの。——ただ……」

彼女が口ごもったとき、私は少し緊張した。

「そんな書き方をされて、もし私が判決で有罪になったら、あなたの作家生命が絶たれるんじゃないかと、そのことの方が心配で……」

思い詰めたような彼女のいいかたに、私は思わず笑ってしまった。

「絶たれるほど大層な作家生命なんか、もともと私は持つてませんけどね……」

「でも……」

私が一笑に付しても、彼女の不安は消えないようである。あなたの事件を書きましようとして、最初の約束をしたのが三カ月前で、そのときから彼女はそのことを悩み続けていたらしい。

「私、判決がこわいんです。どんなに心から真実を訴えても、法廷というところではそのままには通じない気がするんです。こうして、あなたとは一対一で言葉が通じるでしょ。それが法廷では、何か無表情な壁に言葉がはね返されてるみたいなんです。それを思うとどうしても絶望的になります。——ですから、有罪判決もありうると思いますし、そうなったらあなたにどんなに迷惑をかけるかと思つて……」

もし、ここ二三年程の彼女との接触がなければ、彼女のこんな配慮を私は不思議な気持で受けとめねばならなかったろう。有罪となれば重刑を宣告されるかも知れない人である。いわば藁をも掴みたい立場にいるはずなのに、それが私の取るにも足りぬ作家生命の方を案じてくれているのだ。い

までは、彼女をそういう性格の人として私は納得できる。

これから書き始めようとして、私に不安がないわけではない。果して彼女の長い話を、一片の矛盾もごまかしも感じずに聴き通すことができるかどうか、いまの私に確信があるわけではないのだ。机の向こうに深い闇を見ているようなたじろぎと緊張がある。

この陰惨な事件が発生したのは、一九七四（昭和四九）年春であった――

関西ではこの年の春は遅かった。三月十七日も、晴れてはいたが肌寒い日曜日であった。

甲山学園^{かふとやま}の園長和間義典は、この日午後二時から西宮勤労会館での学園の保母植山重美の結婚披露宴に出席した。会費式の宴で、この日当直でない指導員や保母は殆ど顔を見せていた。挨拶に立った和間は、出席できない職員や園児達から託されたお祝いの言葉を伝えた。こういとき彼は余り教訓的な話はしない。宴の終ったのが四時過ぎで、そのあと和間は職員達を二次会に誘った。この夜、彼は珍しく深酒をした。何軒廻ったのか、西宮駅前に来たときにはいつの間にか学園のボーラーマン富岡吾一と二人になっていた。

家に帰り着いたとき、待ちかねていた妻の悠子から玄関先で声を掛けられた。

「どこにいましたの？ 綾子ちゃんが行方不明になって大騒ぎになっていますよ」

冷水を浴びせられたように、和間の酔いは一瞬に醒めてしまっていた。

「電話が入ってるのか」

「もう、二度もかかりましたよ」

駆け上ると、妻へのいいわけより先に電話を手を取っていた。まだ見つかっていないことを確か

めると、直ちに車を飛ばした。神戸市東灘区御影町の家から甲山学園までは、車で三十分足らずである。飲酒運転をしていることなど忘れていた。

皮肉だなと思う。こんなに遅くまで飲み歩くことなど年に一度か二度しかないのに、それがこのような夜に当たってしまったのだ。一番肝腎なときに居合わせなかった不覚を悔いつつ、それでも和間の胸中にはまだ楽観したものがあった。着いた頃にはもうどこかの警察から保護の報せが入っているのではないかと思えて、殆どそれを信じかけていた。精神薄弱児収容施設である甲山学園では、園児の行方不明は初めてのことでない。その度びにどこかで保護されて、和間は始末書を書かされてきた。

日頃一円の金も身につけてない園児だが、電車に乗って意外に遠くまで行っていたりする。大人の直ぐあとについて乗降すれば、駅員はつい見逃してしまふものらしい。しかし昼間は余り眼にとまらぬ園児も、町から子供達の姿の少くなる夕暮から夜になると、たいていは不審を抱かれて警察に通報される。園から出た子も別に計画的に脱走を企んだわけではなく、なんとなくふらっと出て来たのだから、これといつて行く当てがあるものでもない。一度真夜中の一時に発見された子がいて、そのときも随分離れた土地の飯場の傍の草むらに寝ていた。飯場の男が不審に思つて尋ねると「カマトヤマガクエン」と答えて、それが兵庫県 of 甲山学園だと分るまでに時間がかった。

ただ今度の場合、行方不明になっているのが女の子であることに、和間の気がかりがあった。佐瀬綾子は十二歳とはいえ、発育が悪くせいぜい六、七歳にしか見えない。それでも変質者の眼には、女の子に違いなからう。甲山学園を下った直ぐの所にある北山ダムの周辺はアベックの多い所で、それだけに変質者の出没する場所でもあった。かつて同じような施設のななくさ学園の女兒がダン

ブカーに連れ去られたことがある。さいわいにも無傷のまま精神病院の前に置き去りにされていた。興奮のあまりその子が脱糞して、さすがに処置に困ったらしい。

和間はいまさらのように寒さを感じていた。酔いが醒めたというよりは、やはり登るにつれて気温がひどくさがっているようである。甲山学園は標高二百メートルの位置にある。

車が学園に着いたときには、もう午前零時を過ぎていた。学園内はひっそりしていて、ひよっとしてこれはもう綾子が発見されて、皆帰ったあとも知れぬと一瞬思いかけた。彼は酒気が完全に消えていないことを気にしながら、管理棟の事務室に入って行った。事務室には若葉寮の職員が一人居て、彼女からまだ綾子が見つからぬこと、非常召集された職員が全員探しに出ていることを告げられた。やがて職員達が戻り始めた。副園長財津の報告では、綾子が行方不明になった状況は次のようであった。

この日の青葉寮の宿直は指導員の牛島陸雄と保母沢崎悦子であったが、最初に綾子のいないことに気づいたのは沢崎であった。

青葉寮の夕食は午後五時からであるが、この日は寒かったので沢崎は四時四十分頃には子供達を食堂に集めた。日勤の指導員市丸美子の帰って行くのが四時三十分で、彼女と一緒に青葉寮を出てから沢崎はサービス棟の食堂に入っているので、この時刻は正確と思われる。

食堂に綾子が来ていないことを知っても、沢崎は余り気になかなかった。この子はよく食事に遅れることがあって、その度びに呼びに行かねばならないのだった。他にも来てない子がかなりいたので、集まっている子供達に食事をさせ投薬をして、一段落したところで青葉寮の方に探しに行った。正岡利博を見つけて食堂に行かせたが綾子は見つからないので、沢崎はいったん食堂に戻って

まだ食事の終わらない子供達と一緒に済ませた。そのあともう一度寮内を見廻ったが綾子の姿は見当たらなかった。食堂に戻ってみると牛島がいたので、綾子のいないことを告げて「外を見てくるから、子供達を見ていて」と頼んで出て行つた。牛島は夕食前まで数人の子等を連れて、学園の表門を出て五十メートルほどのところにある進入路の脇の木の切株を掘る作業をしていたので、綾子が外に出たのなら自分が気づいたはずだと思った。むなしく帰つて来た沢崎と一緒に、牛島も園内を隈なく見て廻ったが、綾子の姿はどこにもなかった。綾子の自宅は明石なので、一人で帰れるはずはなかった。

ようやく不安を抱いた二人が、園の近くに住む副園長の自宅に電話で報告すると共に、西宮警察署の甲陽園派出所に園児行方不明を通報したのが午後七時頃である。緊急時にはそうする手筈が決められていた。牛島が各職員の自宅に連絡を入れ、駆けつけた者達による搜索が開始されたのは九時頃である。西宮署からは警察犬も連れて来て学園内外を搜索したが、成果はなかった。和間が着いたのは警官達の引き揚げたあとだった。

「綾子ちゃんを最後に見たのはいつなんですか」

和間の問に、財津は直ぐに答えた。それはもう警察からも訊かれたことであつた。

「三時のおやつの時間には居たそうですから……三時過ぎから四時半頃の間には居なくなつたようです」

和間は外に出てみた。こんな時刻に学園の外に立つたことのない彼は、取巻く闇の深さに恐怖を覚えた。この闇のどこかに綾子は行き暮れているのだろうか。山中のどこかで氷でも張つていそうな冷えこみである。保母のつける宿直日誌で、綾子のことが「地面に落ちている木ぎれや葉っぱや

草をむしって口に入れる」と書かれていたことを、和間はある痛みを伴って思い出していた。

深夜の職員会議が開かれたが、和間は一切の進行を副園長に委せて黙っていた。慚愧の思いのみ深かった。この会議を以て深夜の搜索は打切られた。暗闇の山中では懐中電灯の小さな灯をたよりの搜索は、これ以上無理だと判断したのだ。

職員達は翌朝の搜索に備えてそのまま園内に泊まったが、責任を感じた和間はもう一度指導員の泉竜美と、自動車でドライブウェイを遠くまで探しに行った。ひょっとして自動車で連れ去られた綾子が、路傍に置き去りにされているかも知れぬと思ったのだ。ライトに浮かんでは流れ去る路傍に眼を凝らしつつ、和間の胸中に「迷える羊」という言葉が浮かんでいた。クリスチャンの和間は、それが聖書の一節から来ていることを知っていた。「汝等の中誰か、百頭の羊ありて其一頭を失ひたらんに、九十九頭を野に舎おきて其失せたるものを見出すまで尋ねざらんや」と、ルカ伝はイエスの言葉を伝えている。

和間の不安は濃かったが、しかしこれが彼の後半生を狂わせてしまうほどの大事件の発端だとは、このときまだ知る由もなかった。彼は間もなく四十三歳になろうとしていた。

大阪湾を見降ろす六甲山系の一番東の端に位置する甲山は、標高三百九メートルの丸く盛り上った山である。その名の由来通り、兜を伏せた形をしている。市街に近接したこの山は、市民のハイキングにふさわしい緑地で森林公園もあり、中腹には北山ダムの湖面が光っている。このダムを過ぎて少し登った所に甲山学園はある。学園の所在地は西宮市甲山町五三で、ちょうど甲山の西麓にあたり、眼の前に甲山の丸い山頂を仰いでいる。

和間は学園のグラウンドに立って眼前の甲山山頂を仰ぐのが好きだった。それは彼のひそかな感傷ともいえた。彼が学んだ関西学院大学では、正面の時計台の背後にこの甲山が見える。青春の日々に学舎から仰いだその山頂を、いま彼は裏側の位置から仰いでいることになる。この甲山学園は、彼の若い日の理想を体現する場所のはずであった。

甲山学園がこの地に設立されたのは一九六八（昭和四三）年で、武庫川児童園がここに移って来て名を改めたという経緯がある。和間義典は武庫川児童園とは創立時から深い関係を持っていた。彼が精神薄弱児とかかわりを持つようになったのは、関西学院大学の博士課程に学ぶかたわら武庫川病院でアルバイトをしていた時期である。ここは精神科で、彼の専攻は臨床心理学である。

和間が驚いたのは、精神病院では大人と児童の患者が混在していることであつた。それは児童にとって決して望ましいことではなかった。更に精神病者と精神薄弱者が一緒に混在しているのも問題といえた。一九五〇年代の精神病院では、まだ電気ショック療法やロボトミーが主流で、ようやく薬剤治療への転換が始まろうとしている過渡期であつた。

とりあえず病院内に児童病棟が作られたが、その成果を踏まえて武庫川児童園という精薄児施設を独立させたのが一九六〇（昭和三五）年である。このとき、こういう施設には臨床心理学を修めた児童指導員が居なければ開園できないことが分つて、和間は武庫川病院在職のまま出向という形で名前を貸し、一九六五（昭和四〇）年から副園長として専任となつた（園長は武庫川病院院長）。

佐瀬綾子が行方不明となつた一九七四（昭和四九）年三月、和間は甲山学園と同系の北山学園の園長も兼任している。北山学園は精薄児童の通園施設で、子供達は自宅から通つて来る。共に社会福祉法人甲山福祉センターが経営する施設で、同センターにはこのほかに特別養護老人ホーム甲寿